

三年ぶりの「パパ」

今年も無事卒業式を終え、26名の生徒が巣立っていった。毎年思うことだが、国民が生活に疲弊している混沌とした未来(明日)が見えにくいそんな社会に、生徒たちを送り出すことへの大人としての責任を感じる後ろめたさがある。

卒業は人生の通過点に過ぎないので、豊翔高等学院では生徒の卒業後も積極的に支援している。自立に立ち向かうのは生徒だが、私たちには自立を促す大人の責任が続くだろう。私は「人に頼り、人に甘えて、迷惑をかけながら生きて欲しい」と卒業生にお願いしている。そして「人との出会いこそが幸せへのメルクマールである」とも伝え続けている。お花もお礼の言葉もたくさんもらった。彼らからのこれからの連絡を楽しみに待ちたいと思っている。

そんな私も、この3月で「明誠高通信制課程・准校長」を卒業した。私の仕事は通信制本校本部と運営本部の統括指導であったが、この3年間を振り返り勝手ながら悔いは大きい。今後はサポート校の一員として、通信制課程のさらなる前進に協力を惜しまない想いである。

明誠高通信制課程は広域通信制であり、全国で生徒を募集し各地域に設置した教室で指導することができる。故に全国の都道府県に40校以上の明誠高通信制課程サポート校(明誠高ではサポート校を「SHIP」と呼んでいる。)が存在し、北は北海道オホーツクと札幌に、南は沖縄には2校、佐渡島にも30名生徒規模のサポート校(SHIP)があり、生徒数は全国で650名を超えている。

その全国組織を統括管理指導しているのは通信制本校本部ではなく「通信制課程 SHIP 運営本部」である。その責任者である運営本部長は、恥ずかしながら実は私の愚娘である。彼女は10年以上前から通信制に携わり、その本部長任務も結構長い。3年前に私が准校長としての仕事を本校からいただき、共に親子で通信制課程の量的質的前進に向けて微力ながら奔走してきた。

彼女は私を「准校長」「丹羽先生」などと呼び、私は「本部長」「先生」と呼びながら3年間で過ごした。職員室や会議の席ではもちろん、食事の席でお酒を呑んでも仕事上の関係は変わらぬ雰囲気であった。私が准校長を辞する報告を入れた後に、そんな彼女から「パパの水餃子が食べたい!!」とラインが来た。水餃子は私の得意な料理である(笑)。

実に3年ぶりに「パパ」と呼ばれた。

(丹羽 豊)